

「第13回河川整備計画策定専門家委員会」議事概要

日時 平成29年10月27日（金） 午後3時30分～午後5時30分

場所 東京都庁第一本庁舎42階特別会議室B

出席委員（名簿順）	宮村 忠	関東学院大学工学部名誉教授
	山田 正	中央大学理工学部教授
	三島次郎	桜美林大学名誉教授
	土屋十罔	前橋工科大学工学部名誉教授
	長谷川敦子	東京都島しょ農林水産総合センター 振興企画室長
	小倉紀雄	東京農工大学名誉教授

議事 (1) 都における河川整備計画の策定状況について
(2) 現場視察報告
(3) 新河岸川及び白子川河川整備計画（変更原案）について
(4) 目黒川流域河川整備計画（原案）について
(5) 今後の予定について

○河川整備計画策定専門家委員会設置要綱の改正及び運営要領の策定について

→事務局より説明を行い、了承を得た。

(1) 「都における河川整備計画の策定状況」及び(2) 「現場視察報告」について

→事務局より説明を行った。

(3) 新河岸川及び白子川河川整備計画（変更原案）について

→事務局より説明を行った。以下は委員からの主な意見。

- ・パブリックコメントでは、限られた自然環境を残したいという意見が多い。治水と環境を両立させることが難しい場合もあるが、護岸の材料、構造を適切に選定して、川と地下水を遮断しないなど小さな工夫が重要。
- ・少しの工夫で河川環境の多様性を図ることができる。生物的視点から考えるなど、細かい様々な視点をもって多様性を図ればよいと思う。
- ・湧水を有効に生かすことなども配慮すること。
- ・現場視察では、敷地を嵩上げしている住宅が見ることができた。これは総合治水対策の効果かもしれないが、他の流域ではこうした総合治水対策が進んでいない場所もある。

堤防整備など公助の重要性に対しては住民の認識も高いが、敷地の嵩上げなど自助の重要性は伝わりにくい。住民が自助の重要性を認識することが大切。

- ・閑静な住宅街といったまちの特性に相応しい河川にすると良い。
- ・湧水保全については川だけで議論するのではなく、住民が自助で地下に浸透させることの重要性を認識できるようにすることが必要。
- ・河川整備計画の目標期間は30年と短い、将来はロンドンのテムズバリアのような施設を河口につくるなど、行政は50年、100年後の夢のある計画を持つておくことも必要。
- ・超過洪水への対応も議論してほしい。
- ・河川の親水整備が進むことにより、水難事故リスクも増加することに配慮が必要。
- ・洪水管理のみならず、維持用水や低水管理のため水位計の増設が望まれる。

(4) 目黒川流域河川整備計画（原案）について

→事務局より説明を行った。以下は委員からの主な意見。

- ・合流式下水道からの河川への雨天時放流に対して、初期汚濁水を抑制したり、放流水質の数値目標設定等を議論することが必要。
- ・河畔の桜まつりなどにより多くの市民が集い、賑わいが見られる。しかし、河岸に多くの人を呼び込むとトラブルや事故もあり得るため、水難事故対策として河岸等に浮輪を取り付けるなどの配慮が必要。
- ・目黒川は市街地を流れる川として認識し、他河川からの導水などによる水源の確保を長期構想として持つべき。
- ・治水と環境を両立するため、市街地を流れる河川流域ではコスト面で難しいと思うが、合流式下水道から分流式下水道に切り替えていく構想を持つことが必要。
- ・住民との話し合いの場として流域連絡会などを設けることが必要。
- ・新河岸川及び白子川河川整備計画原案には記載があるが、健全な水循環に関する記述の追加を検討すること。
- ・総合治水対策として、貯留浸透の整備を実施してきたことで、水位計のデータなどから流域の変遷がわかる定量的な評価を行うことが重要。
- ・水位計やカメラの箇所を増やすことで、よりIT化を進めること。
- ・生物の生息状況から評価につながるような指標を考えるとともに、事業については維持管理費もかかってくるため、長寿命化などについて住民の理解につながるものを示していくべき。

(5) 今後の予定について

→事務局より説明を行った。

(以上)